

青い地球の未来へ向けて
地球環境国際賞「ブループラネット賞」10周年記念講演会

日時 平成14年5月14日
場所 経団連会館・経団連ホール
テーマ 「青い地球の未来へ向けて」

平成13年に地球環境国際賞「ブループラネット賞」が10周年を迎えたことを記念して、550名余の参加者のもとに記念講演会を開催しました。はじめに、環境問題への理解を深め、その解決へひとりでも多くの方々が参加されるようにとの期待を込めた瀬谷博道理事長の挨拶があり、続いて近藤次郎理事・顕彰選考委員長による基調講演が行われました。午後のセッションでは、英国のノーマン・マイアーズ博士、米国の真鍋淑朗博士、同じく米国のティオ・コルボーン博士がそれぞれの専門分野についての最新の研究結果や情報を交えて熱心に講演されました。これらの講演は、石弘之東京大学教授の巧みな総合司会により進められ、会場を埋め尽くした聴講者と講演者との間で、活発な質疑応答が行われました。



■ 基調講演
近藤次郎選考委員長
「ブループラネット賞10年の歩み」



地球環境問題は、人間の活動が原因で地球の環境に悪い影響が生じているものと言います。人類が地球上に現われたのは約500万年前ですが、ヒトは環境を変えて発展して来ました。それは文明ですが、人口が増え、文化や技術が発達して、現在は多くの矛盾が生じています。地球規模の環境問題は、人間を中心に据えて眺めてみますと、我々を取り囲む大気、水、土、生物のすべてに影響をおよぼしております。代表的な問題としてオゾン層破壊、気候変動、生態系の保全、環境倫理・哲学、環境ホルモンなどが挙げられます。これまで10年間に表彰を受けられた20件のブループラネット賞受賞者の方々の業績を簡潔に紹介いたしましたが、先見性と情熱に溢れた活動が、地球環境分野の広い範囲にわたって進められてきたことを改めて感じます。今後もさらにその範囲が広がってゆくものと予想しています。

■ 受賞者講演
ノーマン・マイアーズ博士（第10回受賞者）
「環境保全の研究における最近のブレークスルー — 持続可能な開発のために —」



最近の私の研究テーマから3つを選んでお話しします。一つは生物多様性のホットスポットです。生物種は地球全体に広く一様に分布しているのではなく、高密度で生息しているごく狭い限られた地域があります。地球上の25カ所、陸地面積のわずか1.4%の地域に、植物種の40%、動物種の30%が生息しています。これら25カ所の環境保全に努めることは、生物多様性の維持に極めて効果的です。二つ目の研究では、農業、化石燃料、道路輸送、水、森林、漁業などに対する世界各国政府の補助金が、環境と経済の両方に悪影響をおよぼしていることが分かって来ました。各国の納税者は補助金と環境修復費という、相矛盾する費用を支払い、二重の負担をしていることになるので、多くの国が補助金の削減に挑戦し始めています。三つ目の研究では、発展途上の17カ国と移行期にある3カ国の合計10億人を越える人々が、近年、購買力の向上にともなって、大量消費の食習慣を

身につけ、自動車の保有量を拡大しております。その結果、水や穀物の不足および大気汚染など、環境への深刻な悪影響を引起こしています。どのような対応を取るべきかが、重要な課題となって来ています。

真鍋淑朗博士（第1回受賞者）
「地球温暖化と世界の水資源」



地球温暖化は起こっているのか？なぜ起こるのか？将来どうなるのか？ということについてお話しします。海洋－大気－地表のシステムを結合させた数学モデルを用いて、気候変化の予測を試みておりますが、北半球の平均気温を見ますと、20世紀後半の気温上昇は明瞭でCO₂濃度も急上昇しています。温室効果ガスは互いに相乗効果があって、例えばCO₂濃度がわずかに増加したために温度が少し上昇すると、温暖化効果を持つ水蒸気が大量に発生して、温度がさらに上昇することなどが起こります。温暖化に伴って地球の降水量、蒸発量が上昇するようになります。降水量の変化は地球全体で均一に広がるのではなく、緯度の違い、内陸と海岸側など、地域によって異なります。そして、流水量の増加する川がある反面、現在の半乾燥地帯の土壤水分がさらに減少して砂漠化が進むなど、極端な現象があちこちに広がります。現在の予測では、21世紀が進むとともに世界の農産地帯で水不足が深刻化し、水資源の管理が人類にとって大きな挑戦課題になると予想しております。

ティオ・コルボーン博士（第9回受賞者）
「私たちは生来の機能と形を子孫に継承してゆけるのだろうか」



化学物質が日常の生活の中に浸透することを放置しておいてよいのか？ということについてお話しします。化学物質はすべての人々の体内から検出され、その影響は、すべての世代に及んでいます。特に子宮内で内分泌攪乱物質、いわゆる「環境ホルモン」にさらされますと、胎児は特に大きな影響を受けます。胎児期にさらされると、生理、免疫、神経などの機能障害、生殖機能の発育に影響が現われ、出生後には知能、行動、免疫機能がそこなわれます。また、成人に対しても、自己免疫不全、生殖腺癌、不妊の原因となるこ

とが証明されています。そして影響は女性よりも男性にとって、より大きく危険性が高いのです。日本では1970年代以降、胎児死亡率が女子より男子の方が高くなっているという報告も出ています。人類は生物圏の化学的組成を変化させ続けていますが、私たちの多くは、こうした活動がどのような意味を持つのかを理解していないといえます。内分泌攪乱物質の濃度と影響について、国際的な研究協力を進めて、その結果を公表することは、緊急の課題です。手後れになる前に、生来の人間としての機能と形を守るために、子宮環境を守る行動を起こしましょう。



総合司会 石弘之教授